

公園を活用した博物館の普及事業「公園博物館」

秀瀬みのり*・高田みちよ*

要 旨

公園を活用した博物館の普及事業「公園博物館」を実施するため、事前調査として高槻市内の全ての公園を目視調査した。その結果、子どもの年齢によって公園の利用状況が違ふこと、手入れの頻度によって雑草の生育状況などの自然度が違ふこと、住宅地の整備年代によって公園の設置状況が違ふこと、などを把握した。

「公園博物館」では公園内にある自然に目を向けることで、公園での遊び方や過ごし方を豊かにすることを目的としている。申込不要で気軽に参加できるよう、地域で活動する子育てサークルに協力を依頼し、公園内の植樹、季節の草花である雑草、昆虫や鳥などの生き物探しを実施した。自然と接する際の着目点が変われば身近な自然や生き物を見つめる楽しさが増すはずで、大人に対しても普及教育の効果を上げている。2020 年からは新型コロナウイルス感染症のため、当初予定どおりには事業展開できていないが、今後も継続予定である。

キーワード

公園、都市計画、博物館、普及行事、身近な生き物

はじめに

日本において公園は 1873 年（明治 6 年）に名所旧跡等の行楽地として、政府が「人々皆楽しめる場として、公園にふさわしい土地があれば申し出るように」という太政官布達第 16 号を交付し、寛永寺（後に上野公園となる）などが日本初の公園に指定されたのをはじめとし、市民の憩いの場等として整備されてきた（高橋ら、1994、PARKFUL, 2022）。

1956 年（昭和 31 年）に都市公園法が整備され、国民一人当たりの公園面積を 6 m²とし、街区公園にぶらんこ、滑り台、砂場を設置することが義務付けられた（平塚、2021）。1993 年（平成 5 年）の法改正により、都市公園法施行令第 1 条の 2 において住民一人当たりの都市公園の敷地面積の標準は、市全域で 10 m²以上、市街化区域で 5 m²以上とされた。遊具の設置義務は削除されたが、現在でもその 3 種類を含む 13 種類の施設が遊戯施設として明記されている。1968 年（昭和 43 年）に施行された都市計画法によって整備された新興住宅地、団地、マンションなどには、計画的に公園が設置されるようになった。

公園は子ども達にとって、最も身近な自然環境のひとつである。人工的な環境であっても、木が植えられ、四季の草花である雑草が生え、昆虫や鳥がやってくる。子どもの安全が確保されており、自宅から近くて何度も訪れることができ、いつでも自然の一部に触れられる場所である。そこで、子ども達が親しむ場所に少し違う視点を加えることで、自然と接する際の着目点に変化し、興味が湧いてくることを目的に、高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）（以下、あくあびあ）では、2019 年（令和元年）から「公園博物館」事業（以下、公園博物館）を行ってきた。

公園調べ

公園博物館の実施候補の下見として、植栽木、雑草、昆虫類、鳥類などを記録するために、2019 年（令和元年）から 2020 年（令和 2 年）にかけて、高槻市内の公園の調査を行った。高槻市は大阪府の北東部に位置し、北半分が山間部、南半分が都市部で、人口約 35 万人の中核都市であり、市公園課所管の 221 箇所の都市公園、394 箇所の児童遊園がある

*高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）

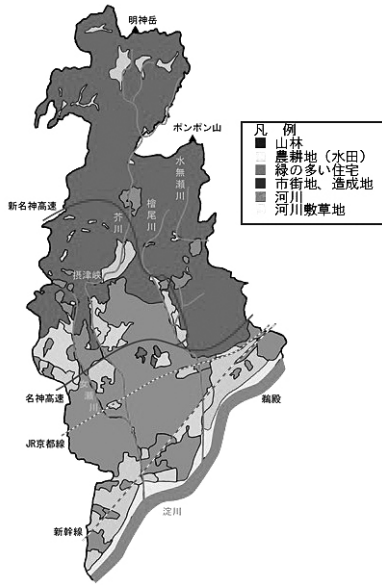


図1 高槻市図

(図1 高槻市図)。
 児童遊園は、
 1947年(昭和22年)
 に施行された児童
 福祉法第四十条に
 「児童厚生施設は、
 児童遊園、児童館
 等児童に健全な遊
 びを与えて、その
 健康を増進し、又
 は情操をゆたかに
 することを目的と
 する施設とする。」
 と規定されてい

る。しかし、高槻市においては500㎡以下の小規模な公園のことを児童遊園と呼んでおり、児童福祉法上の児童遊園は、市内には設置されていない。公園と違い、児童遊園は都市計画決定がされていない。

実際に公園、児童遊園に行ってみると、小さな児童遊園でもたくさんの子供が遊んでいる一方、大きな公園にも関わらず利用されていないところもあった。そこで、市の公園課から市が管理する公園のリストを提供してもらい、2020年(令和2年)4月から2021年(令和3年)6月にかけて、そのうちのすべての公園、児童遊園の写真撮影を行うことにした。また、そのうち38箇所の公園・児童遊園では生物調査を行った。2020年(令和2年)の春は新型コロナウイルス感染症対策のため全ての学校が休校しており、子どもの多い地区の公園には幅広い年齢層の子ども達が来ていた。目視での観察を行う中で、

以下のことがわかってきた。

〈利用について〉

- ・未就学児は午前中に多い。昼食時に帰宅し、午後からはあまり利用していない。反対に、午後は小学生以上の大きな子どもが多い。
- ・遊具の少ない小規模な児童遊園は、未就学児の利用が多く、小学生以上の子どもはほとんどいない。

〈公園内の環境について〉

- ・小規模な公園、児童遊園の管理は自治会単位であるため、住民の生活レベルや近所づきあいによって、手入れの状況がちがう。新興住宅地では、管理のルールが初めから決まっているためか、きれいに管理されているところが多い。管理がいいということは雑草が生えていないということでもあり、自然度は低い。
- ・ほとんど利用されていないことがわかるのは、砂場に草が生えていることや、滑り台の下が踏み固められていないなど。こういう公園・児童遊園では隣家の植木鉢や自転車などが置いてあることも多い。

〈公園の設置状況について〉

- ・都市公園法施行前からの旧集落には公園はなく、児童遊園のみであった。高槻市では1960年(昭和35年)～1980年(昭和55年)にかけて人口が爆発的に増加しており、この間にできた住宅地には公園はあるが、数が少なく、小さな児童遊園が多い。1993年(平成5年)の都市公園法改正以降に整備された新興住宅地は公園が多く、児童遊園が少ない(図2 旧集落と新興住宅



旧集落(唐崎)の公園配置：
 少数の児童遊園がある



新興住宅地(日吉台)の公園配置：
 計画的に配置された街区公園がある

図2 旧集落と新興住宅2箇所の公園配置図(◆:公園、●:児童遊園)

2箇所の公園配置) (高田, 2021)。

- ・マンションなどの一棟建ての大規模集合住宅の場合、開発業者が公園を作って市に管理移管しているので、市民に開放されているものの、マンションの付属公園のように見えるものが多い。
- ・団地の緑地は計画的に建物と緑が配置されていて、住居、公園、緑道の境目がはっきりしない。これらは市の管理ではなく、団地が管理する公園であるが、団地以外の住民にも開放されている。
- ・「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」が2002年(平成14年)に出され、遊具の周りの「安全領域」の数値が示されたため、狭い児童遊園ではぶらんこや滑り台が壊れると、同じ遊具への入れ替えができなくなるところもある(国土交通省, 2002)。また、動く遊具で事故が起こると管理責任を問われるため、より安全性の高い遊具への転換が図られている。このため、小規模な公園ではスイング遊具が多くなり、大きな子ども達には少々物足りないものとなっている可能性が高い(図3 スイング遊具)。
- ・タコ型の滑り台などのオーダーメイドのコンクリート製の遊具は減り、棒やネットなどを組み合わせた既製品の遊具の設置が増えている。また、高槻市の人口構成は高齢者が多く、全ての世代が利用できる公園となるよう、健康遊具の設置数が増加している(図4 健康遊具)。

公園博物館

ここからは、公園、児童遊園を区別せずに公園と表記する。



図3 スイング遊具

公園博物館は、日常的に公園を利用している人に対して、公園内にある自然に目を向けることで、公園での遊び方や過ごし方を豊かにすることを目的としている。公園博物館では気軽に参加してもらうことを目的に、事前申し込みではなく、その場に居合わせた人達と楽しむことにしたため、すでに公園で活動を実施している地域の団体に協力を依頼した。対象とする地域で活動する団体の協力を得ることで、その地域の公園利用者から受け入れられやすいと考えたためである。高槻市には子育て支援センターが6箇所、未就学の親子を地域でサポートする「つどいのひろば」が12箇所あり、これらの施設が周辺地域の公園を会場として、「公園ひろば」というイベントを定期的に開催している。高槻市が主催する「公園ひろば」事業は親子で一緒に外で遊びながら友達づくりをしたり、スタッフと交流しながら子育て相談を気軽にできる場所を提供することを目的としている。

公園博物館を開催するにあたり、「公園ひろば」を実施している施設について4箇所に声をかけたところ、2箇所の施設が協力してくださることになった。

NPO法人三島子ども文化ステーションが運営するつどいのひろば「どうぞのおいす」による「公園ひろば」は、紫町公園(高槻市紫町2)で年9回程度開催している。内容はフラフープやトランポリンなど遊具を使った自由あそびの他、ダンスや体操する時間、大きなレジャーシートの上で施設スタッフによる絵本の読み聞かせや手遊びなど、多彩なプログラムを行っている。公園博物館は「公園ひろば」のプログラムの一つとして、未就学児と保護者を対象にした活動を実施した(表1)。

子ども達が集まってきたところで、あくあびあの公



図4 健康遊具

イベント名	開催日	開催場所	参加者	協力
あくあびあ公園博物館 ～紫町公園編～	2019年4月18日	紫町公園	22組	つどいのひろば どうぞのおいす
あくあびあ公園博物館 ～清水池公園編～	2019年10月17日	清水池公園	4組23人（保育園1組を含む）	津之江さくら子育て支援センター
あくあびあ公園博物館 ～紫町公園編～	2020年4月16日	紫町公園	新型コロナウイルス感染症対策により延期	つどいのひろば どうぞのおいす
あくあびあ公園博物館 ～紫町公園編～	2020年10月15日	紫町公園	15組31人	つどいのひろば どうぞのおいす
あくあびあ公園博物館 ～紫町公園編～	2021年10月21日	紫町公園	23組53人	つどいのひろば どうぞのおいす

表1 開催実績

園博物館の説明をし、関心を持った人達が参加する。内容は公園内の植樹、季節の草花である雑草、昆虫や鳥などの生き物探しである。はじめにワークシートを配り、ワークシートに描かれているテーマを保護者と共に、または周りの子どもや館スタッフと探しに行く。見つけたらワークシートにシールを貼る。テーマの選定は色（例：黄色い花）、形（例：三角の葉っぱ）、昆虫、

穴など、子どもが認識しやすいテーマを4題設定した。生き物探しには行かなかった子どもや保護者にももらえるように、あくあびあから標本や図鑑を持参し、公園の一角にシートを広げて見学できるスペースを設けた（図5 ワークシート）（図6 参加者の写真）。

公園博物館は紫町公園のほかに、「津之江さくら子育て支援センター」が清水池公園で行っている「公園ひろば」でも実施した。公園博物館事業は2019年にスタートしたが、その後新型コロナウイルス感染症のため延期や中止が続き、当初は他の子育てサークルとも活動を検討していたが、コロナ禍では新しい団体との協力事業を立ち上げることは難しく、現在では紫町公園でのみの活動となっている（表1）。

あくあびあが提供する自然観察会では、生き物をみんなで観察して講師の解説を聞くという流れで実施しているが、公園博物館に参加するのは2～5歳までの発達段階の違う子どもであり、全員が同じように集中して講師の解説を聞くのは困難である。保護者の参加動機も、「子どもが虫が好きだから」、「子どもに経験させたいから」、「偶然公園にきたらイベントがあったので参加した」など、さまざまである。子ども達が楽しみながら自然に触れる経験をするを一番の目的としているので、子ども達の興味にまかせた流れとし、生き物を見たり触れたりして出てきた質問は保護者と共に館スタッフが受け止め、興味をのばすような声かけをするようにしている。イベントが終わった後、保護者から自然や生き物に関する質問をされることも多く、館から持参した標本や図鑑を見ながらの会話を大切にしている。未就学児が対象であるので、子どもが見つけたものは褒めて共感し、詳しい解説は保護者に聞いてもらう。普段子どもを公園に連れて行き会話を交わすのは我々ではなく保護者なので、まず保護者が自然や生き物を受け入れ、興味を持つよう



図5 ワークシート



図6 参加者の写真

になれば、日々の親子での公園遊びの中で身近な自然や生き物を見つめる楽しさが増すはずと期待している。保護者からは「公園にはよく遊びに来ているが、生き物を探してじっくり見るなんて遊び方をしたのは初めて」と感想をいただいたり、イベントに参加していない公園利用者が見に来て、質問されることもあり、大人に対しても普及教育の効果を上げている。

おわりに

公園は近所の小さな子どもからお年寄りまで、さまざま

な年齢の人が利用する公共の場所である。生活に密着した場所だからこそ、少し視点をかえてアプローチすれば、効果的な博物館の教育普及の場となり得る。新型コロナウイルス感染症のため、子どもが集まる行事が中断されているが、今後も継続していく予定である。

謝辞：公園博物館の開催に協力いただいた「つどいのひろば どうぞのおいす」の皆様、「津之江さくら子育て支援センター」の皆様、資料提供をいただいた高槻市公園課に御礼申し上げます。

【引用文献】

国土交通省, 2002, 都市公園における遊具の安全確保に関する指針

高田みちよ, 2021, GoogleMap 高槻市の公園, <https://www.google.com/maps/d/u/0/edit?mid=1gJPaqev4ITrvCyqdP4A5na7hun0pQXvr&usp=sharing>

高橋理喜男、井出久登、渡辺達三、亀山章、勝野武彦、興水肇, 1994, 造園学, 朝倉書店

PARKFUL <https://parkful.net/2017/11/3rd-wave-park/> 2022年2月閲覧

平塚勇司, 2021, 都市公園のトリセツ 使いこなすための法律の読み方, 学芸出版社